

# 特集 短歌の笑い

## 『つきかげ』にみる茂吉の笑い

河野 裕子

斎藤茂吉は生涯に十七冊の歌集を残した。最も高く評価されるのは第一歌集『赤光』と晩年の第十六歌集『白き山』の二冊であるが、歌の面白い味わいという点において私は最後の歌集『つきかげ』が好きである。『つきかげ』には一種不可思議な天然ボケとでもいったような歌が混じっていて、それが何とも可笑しく思わず笑ってしまうことが多いのである。

活動をやめて午前より臥すときに人の来るは至極害がある  
生活を単純化して生きむとす単純化とは即ち臥床なり

二首とも漢語の多い歌である。短歌はほんらい大和ことばで作ってこそ短歌らしい調べと、こまごまとした心の變を表現するのに適した詩型である。そこに、漢語という違和をもちこむと滑稽な感じがでてくる。

内容は実になんでもないことである。茂吉は具合がよくなくて昼前から臥していた。そこへ人が訪ねてくるのはまことに迷惑至極だといっているにすぎない。こういうことは誰にもおぼえのあることだ。そういう無内容を堅苦しい漢語を使って大真面

目で言つてのける。そこに何ともいえないチグハグ感が出てきてそれが面白い。二首目も漢語をたくさん使った歌である。そのうえ、「単純化」という言葉を二度繰り返している。言葉というものは不思議なもので、繰り返しが或る種の可笑しみを誘うことがあるが、この歌などもその好例であろう。

ぶらぶらになることありてわが孫の斎藤茂一路上をあるく

この歌は前にも書いたが（『短歌春秋』72号）、読むたびになぜかいつも笑ってしまう歌である。ありようは、孫の茂一が路上を歩いているだけのことである。そこへ訳のわからない「ぶらぶら」が、のつけから出てきて意表をつく。「ぶらぶら」とか「ぶらぶら」というオノマトペはよく使われるが「ぶらぶら」というのは珍しい。どういう状態なのかがよく分らないオノマトペであるが妙な魅力がある。茂吉がこの言葉を使ってしまった為かこの用例を他の歌で読んだことがない。それにしても「ぶらぶらになることありて」とはどういう場面であるか。しかも、しょっちゅう、ぶらぶらなのではなくて時々ぶらぶらを起こす。そして「わが孫



の斎藤茂一」と何故わざわざもつともらしく名のりをあげているのだらう。こんな風到大真面目に臆面もなく言われてしまうとノンセンスになってしまう。この無意味なところが無意味ゆえに可笑しい。結句の「路上をあるく」は「道歩きをり」くらいなところがおさまり方として自然だと思いがここでも「路上」という漢語を使っており、この歌にとって「路上」が必然の選択に見えてくるから不思議だ。

税務署へ届けに行かむ道すがら馬に逢ひたりあ、馬のかほ  
所得税申告は誰にとつても憂鬱なもので、作者の気持ちに同調しながら四句目まできて不意に梯の段を落とされてしまう。「あ、馬のかほ」には文字通り面食らってしまうが「馬に逢ひたり」の伏線があるから意表をつかれながらついてゆけるのである。このあたりの呼吸のつきかたに茂吉ならではの面白味がある。

作歌時の茂吉は六十六歳。茂吉は昭和二十八年に七十二歳で没している。この歌は最晩年の歌になるわけだが、晩年に近づくとつれて茂吉の歌は放胆な自分勝手な歌になってゆく。「あ、馬のかほ」には定型というタガを外しつつも自由無碍に定型を出入りしているようなところがあって独自の飄逸味がなんともいえない。かつての茂吉ならこうは詠まなかつた。

きさらぎのちまたの泥どろに佇たが立める馬うまの両眼りやがんはまたたきにけり

『あらたま』

「馬の両眼はまたたきにけり」としっかりと描写力をきかせて詠みおさめている。茂吉は三十五歳だった。三十年の歳月が見せる表現の自在感。表現の幅を作るには時間があるということだろう。

おもひいづることあり夏のみじか夜に金瓶かなびんの蚤のみ大石田おおいしだの蚤

金瓶というのは茂吉の生まれた山形県やまがたの村の名前である。大石田は同じく山形県やまがたの町の名でここに茂吉は敗戦後昭和二十年から二十二年まで二年半を暮らした。このことを踏まえないではこの歌の面白さはわからないだろう。「おもひいづることあり夏のみじか夜に」と感傷をこめて歌いだされており、その気になって読んでいって何がくるかと思えば「金瓶の蚤大石田の蚤」である。いったい蚤に地方差というものがあるのだろうか。あるのかもしれないし無いのかもしれない。しかし、どこに行っても蚤にはおおいに悩まされた茂吉には、茂吉独特の識別としてそれは絶対にあつたにちがいない。蚤の形状およびその性質と様態において。このマニアックな、あたかも蚤の顔を拡大して見せるようなこだわりは余人から見ればやはり滑稽で笑ってしまう。蚤の歌といえは、

蚤渡来のみよこのことなどしばし空想しせまき畳たたみに居ある安心あんじん

というけつたいな歌もある。猫や馬の渡来については想像や実証の範囲内のことなのだが、蚤にまで空想が飛ぶところがいかにも茂吉である。

今回、茂吉の歌を第一歌集『赤光』から「つきかげ」までざっと読み返してみたがやはり茂吉は面白いとあらためて思った。他の歌人にはないコクのようなものが茂吉の歌には濃厚にある。散文も同じくである。人間自体やはり並外れておもしろいところを持つていた人らしい。短歌という形式は、何でもないちよつとしたことを入れて詠んでみると味わいと奥行きのある世界が生まれってくる。ディテールの精確な描写。細部へのこだわりの徹底と描

写力が茂吉は拔群だったのだろし、そこに茂吉独特の笑いを誘う要因があったのだと思う。

一般的に大真面目な人の言動にはなぜか笑ってしまふところがある。先にあげた「ぶらぶらになることありてわが孫の斎藤茂一路上をあるく」にしても、茂吉自身は笑わせようと思つて作つてゐるのではあるまい。茂吉としては大真面目に作つてゐるのである。以前読んだ「サザエさん」の漫画のなかで、車中でコウモリ傘

をあけようとして何度やつても失敗している紳士の必死なようすを見て回りの人々が笑つてゐるのがあつた。人の視線に気づかず、何かを大真面目に必死でやつてゐるときの人間には、それ自体に滑稽感とともに何かかなしいようなものがある。笑いとかなしみはどこか表裏一体のようなものを持つてゐるから限りなくわたしたちを惹きつけてやまないものであろう。

武蔵熊谷短歌大会（平成十三年七月十四日）

## 短歌の中の笑い

小池光 VS 沖ななも



猛暑の中の八木橋カトレアホールは短歌会場とは思えないほどの爆笑の渦となりました。短歌のふところの深さがちよつぱり分かつたような笑いがあふれました。



### 近代短歌の中の笑い

小池 きょうは「短歌の中の笑い」という、ちよつと変わったテーマで沖ななもさんとお話します。喜怒哀楽と言いますが、人間には悲しんだり怒つたり、いろいろな感情があるわけです。その中に「笑う」というのもあるわけです。笑わない人はいない、たいていみんな一日に何回か笑つてゐると思ふのです。ところが短歌を読むと、

「笑い」というのになかなか出会わない。一冊歌集を読んで、一回も笑わなかつたなんていうのはいっぱいあります。

沖 そんなこと言つてる小池さんの歌集読

んでも、笑わなかつた（笑）。「笑い」というのは、どちらかというところ文化的に低く思われる。例えば、「悲しい」と言つて、「大丈夫よ」と慰めてもらえるけど、逆に「うれしい」というと、放つておけつて

いうことになる。笑つてゐる楽しい歌つていうのは、共感を受けるのだからうけど、「悲しい」に比べたら入りにくいというのかしらね。

小池 今言われた「低い」という感じ。すごく的確だね。私たちは、笑うくせにどこかで笑いを軽蔑してゐるでしょう。立派な人というのは笑わない、笑われちゃいけないという、僕はそれは近代だと思ふけどね。



## 厨に酒の凍る真夜中

シチュエーションは、釧路の歌かな。啄木は、そういう特定の場所へ行ってるわけです。そこで出会った女と一晚をともしして、何かの話でその女が突然笑い出すんだね。それがぐざりと刺さるわけでしょう。

沖 男と女なんですよ。そのときの女の笑いは、恐らく男には理解できない。怖い笑いです。うれしくて笑ったとか、悲しくて笑ったとか、軽蔑して笑ったとかってことではなくて、出し抜けて笑う。ちよっと異質な……。

小池 この怖さっていうのは多分、対応のしようがないっていうのがあるよね。つじつまがあつて笑うなら、そのつじつまに乗って説得したり、機嫌取ったり、話をつけようっていうのがあるじゃないですか。沖 笑いっていうのは、感情の延長線じゃない、異質などころへ行ってしまうものがあるのかもしれない。

小池 東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

これはだれでも知ってる有名な歌だけ

ど、センチメンタルな歌になつてるでしょう。でも、変な話じゃありませんか。だつて「蟹とたはむる」っていうんでしょ。蟹って動きが早いからね。たわむれるっていう言葉は、ゆっくりした動作なんだよね。

蟹とたわむれる人間を想像すると、すごい敏捷で、運動神経が発達している人が機敏に動いて初めて、蟹とたわむれることが可能なんです。しかも泣きながらそういうことするっていうのは（笑い）、想像を絶する不思議な動作なんだよね。その不思議な動作を意識して取り出したんだけど、そこが読まれなくて、「われ泣きぬれて」で、鑑賞が終わるんですね。

沖 この歌は、私も変な歌だなとは思ってました。ばかばかしさというか。

小池 それはどこかで複雑な笑いにつながる。自画像としても、どこかで笑ってやらないと、せつかく蟹を出したかいないか。この歌を鑑賞したことにならないと思う。

打明けて語りて

何か損をせしごとく思ひて

友とわかれぬ

これ僕は笑ったけどね。打ち明けて何か

大事なものをなくしたなっていう気持ちほだれでもあるけど、それを損したと、ちよつと一万円札落としちゃったみたいにな。

沖 まず損得の感情にもつてきたことが。俗っぽいことを平気でやるところなんですよ。ね。啄木のお笑いなんです。

小池 それが啄木の偉きなんだよね。俗の中に真実がある。確かに我々は本当に大事な話を打ち明けると損したように思うものね。

## 茂吉の歌

小池 斎藤茂吉は、啄木のおかしさとは違う。本人は笑わない人だと思ふのね。ところが出てきたものには、往々にして爆笑させるものがある。特に晩年の歌集は笑えますね。晩年の歌で笑えるのは茂吉だけではないかな。それはとつても素敵な眺めですよ。

銭湯にわれの来るとき浴槽にて陰

部をあらふ人は善からず

私は爆笑ですね。何でこれがおかしいかという、およそくだらない感想で、普通は歌になんかならないですよ。それを、も

のすごい格調高い文体でね。「銭湯にわれの来るとき浴槽にて陰部をあらふ」この「陰部」という言葉のすこさとか、「陰部をあらふ人は善からず」って、内容と形式が全くミスマッチになつてる。かみしも着ておでん食つてるような（笑い）、そういうギャップが茂吉の笑いなんだよね。この歌は怒つてる歌だけど、爆笑なんだ。

沖 私こそばにいたら、多分怒つてる茂吉を見ておかしいと思う。

小池 名古屋にてひと夜ねむりししづかさ

を問ふ人あらば語らむとする  
何か変でしょう？ つまり「問ふ人あらば語らむとする」なんて、だれも聞いてやらないよ（爆笑）。踏み出しちゃうんだよ、自分の方が先に。名古屋で泊まったら、静かだよかつたと上の句で言つてるのに、「問ふ人あらば語らむとする」って、論理的に変なんです。文体は非常にシンプルにつくられてる歌だけど、そこにねじれというか、変なところがあつて、笑っちゃうんです。

濃厚の関係にある面相に熱海の道  
をつれだち歩む

熱海に行つたら、男女が歩いているのを見たんでしよう。茂吉、例によって不愉快になるわけだよ。ね。「あいつらしい思いしやがつて」（笑い）。それを「濃厚の関係にある」と言う。

沖 おおげさなんです。

小池 使う言葉にちよつとした「てにをは」をくつつける。普通は「の」が入らないよね。「濃厚」って言うとき、「濃厚の関係」っていうのは不思議な関係ですね。

沖 茂吉の場合、男女が歩いてるとかキスしてるとか、何気ないところに「濃厚な関係」があるんですね。

小池 一方的な濃厚関係なんだ。

ねばるちふ手法を用ゐる日もすがら  
われに迫りてものいふ人はや

「先生、原稿書いてください」と粘った人がいた。それを「ねばるちふ手法を用ゐる」って（笑）。こういう言語感覚は、ほかの人はまねできないね。「ねばるちふ」で歌が始まるとは思えないものね。

沖 茂吉の歌って「濃厚」という強い言葉と、「ねばる」という俗語みたいなものが、異質なまま結びついてるおもしろさです

ね。

小池 単なるトリッキーなおもしろさじゃなくて、それが見事に収まるところに収まっている。

沖 言葉のトーンが整ってないっていいたくなりそうなんですものね。

小池 「つきかげ」っていう、亡くなる数年間の歌集からだけ挙げてきましたけど、茂吉はどんどん笑つて読むべきだということなんです。笑うことをためらわせてるものが、私たちの心の中にあるのだけど、それはどうも真実ではないのではないか。豊かなものっていうのはどこかに笑うものがあるんですよ。一級の文学ってどこかおかし。笑いのない小説というのは、どこか二流ですよ。夏目漱石だって森鷗外だって笑いますよ。

### 現代短歌の中の笑い

小池 沖さんが選んでくださった、現代の何人かの歌を見ましようか。

沖 その父に餓鬼と呼ぶる子は笑ふ  
からだまるごと大いに笑ふ

今野寿美

お父さんに「餓鬼」と呼ばれてる。そういう子が笑ってる。人間の根源みたいな笑いですよ。それをお母さんである今野寿美さんが見ると、「からだまるごと」笑ってる。子供の笑いの純粹さみたいなものを感じてると思うのです。これは「笑い」の代表みたいな歌と思っているのです。

すさまじきものとかつては思ひし

か独笑をみづからゆるす

佐藤佐太郎

小池 これ有名な歌だね。老いの歌。若いころは老人がニヤツと笑うのを見て、「人間はあそこまでこわれてしまうのか」とか思ってたんだが、いつか自分がそうしていたっていうんでしょ。そういう自分を許すっていいのか。迫力のある歌ですね。沖 人間のひとり笑いは、うれしいから笑ってるとかではないものね。

小池 簡単なことではないですよ。言ってみれば意味なく、何で笑ったかわかんないけど、笑うというかたちでしか、出てこないものがあるんだね。

沖 押すこともあらず押されて歩む身

をわれと笑ひて改札を出づ

大西民子

これもひとり笑いなんですけど、「独笑」とはちよつと違いますね。

小池 これは自嘲かな。

沖 「われと笑ひて」、人がふつとそんな表情したら気持ち悪いですよ。でもこういう心理ってあるような気がして、この「笑い」も怖いなと思いました。

秋晴れに子を負ふのみのみづから

をふと笑ふそして心底わらふ

小島ゆかり

これだつて楽しくて笑ってるわけじゃないですよ。

小池 この「笑い」はわかりにくいものがある。歌は単純にできてるけれども、二つの笑いの間にギャップと転換があるよね。最初の「ふと笑ふ」というところから「心底わらふ」と、笑いの表情が変わっちゃうっていうね、何かがわかった後の笑い。沖 文旦はどすんとしづか わらふやうな月でてうろたへ者よとわらふ

黒木三千代

月というのは、絶対のもですよ。それに「うろたへ者」というふうには笑われた。

「わらふやうな月」がおもしろかった。満

月と思うのですけど、笑うような月とは、こつちから見た月の表情ですものね。

小池 これは「文旦はどすんとしづか」っていうところがユーモラスだね。黒木さんが彷彿する（笑い）。黒木さんの歌って、女性の中では珍しく笑う歌があるよね。

沖 大づかみなね。こまこましないところが、こつけないんですよ。

小池 そうそう。

沖 誰かいま死んだかくり向日葵が

こちらを向いて笑ったような

石田比呂志

これは笑わせる歌ですかね。

小池 これは悲しませる歌ですよ。つまり「笑う」という言葉を使って泣かせようとするとところがあるじゃない。向日葵がこつち向いて、にこつとしたみたいな感じがある。その時、ああ、だれか今、死んだなっていう感じなんでしょうね。どこか怖い歌です。

沖 不二が笑っている石が笑っている

笛吹川がつぶやいている

山崎方代

石が笑っている、不二が笑っている。方代さんはこういうの多いですね。

小池 「笑う」というと、方代さんは一番引用されますね。ほのほのとしたユーモアとか、心温まる、親しみやすい。

沖 方代さんは、笑いを作ろうとしている感じがあるのね。

小池 数回しか会ったことないけど、人間自体がまるでドラマに出てくるくらいおかしい人だよ。大体いでたちがね、夏なんか真っ白い上下のスーツ着てくるんだよ。それが何ともいえず、無茶苦茶に合わないとかさ(爆笑)。ファッションから既に何かおかしい。で、話すとまたおかしくてね。

沖 悲惨な方に行こうとしたらどんどん行っちゃう人生でしょう。でもそれをとどめているのは「笑い」。自分を笑うということ、行かないように、行かないようにしむけている感じがするんですけどね。

一大事などはなければ体臭も体温も抜かれたましい笑う

武川忠一

小池 肉体から生臭いものがどんどんなく

なっていくって、最後にたましいだけで笑う。

沖 「たましい」という言葉もすごく難しいですよ。まして笑いと結びつけたら、陳腐です。だけどこれは、ああ、そうかもしれないな、すごいなと思いました。

小池 体臭と体温とが並列しているのがおもしろい。普通体臭と体温って全然違う概念だからね。体臭と体温が抜かれるって、ものすごいですね。

沖 鶴はしづかに一本の脚でたちつづけるわらひのさざなみにかこまれ

ながら

加藤克巳

この「わらひのさざなみ」というのはもちろん比喩なわけですけれども。

小池 鶴が一羽いて、波が当たってるけれど、そこに生きけとし生けるものがみんな笑ってるような、そういう解きたい不思議な空間。

沖 「悲しみのさざなみ」でもよかったわけですよ。

小池 それはだめです。つまり「悲しみのさざなみ」だったら、解けちゃうものがあるですよ。「わらひのさざなみ」でないと、お話つくれないじゃないですか。何

かそこで解釈できないものが生じてきて、それが歌にひきつけるんだと思うのね。

沖 あんたホホしようむないことしよ  
うかいな格子は春の銀色しづく

池田はるみ

小池 僕は池田はるみ中村玉緒説。関西弁でやるとそれ自体なんか芝居言葉みたいになるからね。文字の言葉とどっかずれちゃうんだよね。だから大胆なせりふでもおかしいせりふでも、何か言えちゃうんじゃない。これを標準語でやると、なかなか笑えませんが。

笑いの歌って二種類あって、笑いについて考察したのと、それ自体が何かおかしいっていうのね。そのおかしさっていうのは、非常に複雑多岐で、書いてあることがおかしいからおかしさっていうだけじゃなくて、すごくまっとうな平凡なことでも、ある言い回しの中だとすごくおかしくなっちゃうっていうのがあるんだよね。僕はそれが一番短歌の笑いというところで、大事で大切にしたいな。

## 泣き笑いの歌を 岩田 正



いでたちは選手並みだが歩くより遅い走りの老翁も走る

奥村晃作『ビシリと決まる』

世に泣き笑いという言葉がある。文学ではチエーホフの短編がその最たるものであろう。演劇の新派なぞもそうである。笑いの要素を沢山含んでいながら、どこか人生のものの悲しさ寂しさなんかを暗示する。

チエーホフは初期の頃、チューホンテなぞという、おどけたペンネームを用い、おもしろおかしい、そして極めてもの悲しい短い短編を沢山書いた。いまの人はそんなペンネームは使わないが、狙いは同じである。

ごくあたりまえのことを歌っているが、語句を巧みに斡旋したり、言い方をちよつと替えたりして、そこに人生の悲喜を演出する。このごろ作品にあまりお目にかからないが、エロチシズムを匂わせる岡部桂一郎、死んだ高瀬一誌、それに時折ふと、これはと思わせる小池光、鳥濤トリノがましいが私を加えて。

でも専ら、ただごと歌を唱道し、なんとかしてあたりまえを装いながら、笑いを誘発しようとする自分の全作歌能力を傾けて、歌っているのは奥村晃作であらう。本当にただごと歌に終っている多くの歌眉を平気で出しながら、時折光る。これに人生が加われれば超一級だ。

## 亀ことば 大辻隆弘

亀言葉があつたとしても重なるの上下なんか語り合うまい

柴善之助『未来』二〇〇二年一月号

総じて、人を笑わせるのは難しい。短歌の場合ほとりわけそうである。初めから読者を笑わせようとして作った歌はたいてい失敗することが多い。が、確かにある瞬間、短歌を読んで声をあげて笑うことがある。この歌は、読んだ瞬間声をあげて笑った一首だ。

お寺の池などに行くと、亀が甲羅干しをしている姿を見ることがある。彼らは、その存在が「退屈さ」の属性であるかのように、無防備に身体を延べている。そのなかには、一匹の亀の背中に、もう一匹が乗って陽を浴びているものもある。

彼らは語らない。が、作者はあえて「亀言葉」というものがあつたら、と想像してみる。鳴き声も立てない寡黙な生物である亀に、「言語があつたら」という想像そのものが、まずもって意外である。

が、たとえば亀が言葉をもっていたとしても、彼らはどちらが甲羅の上に乗るかなどは語り合わないだろう。

「おい、そろそろ上と下と代わってくれ。重とうなった」

「もう、しばらく経つたらなあ」



そんなのんびりした会話を一瞬想像したりするが、ものぐさな亀は、そんな文句もいわず、下は下で、上は上で、陽をあびるだけだ。作者ののびやかで自在な発想が読者の笑いを誘う。

## ユーモアの衣

喜多昭夫

腰折れに飲食詠むはたとふれば下手な料理にふる「味の素」

坂出裕子「桃花紅」

腰折れの歌を下手な料理にふる「味の素」に譬えて、何とも辛辣。「出来あいの調味料なんか頼らず、自分の味で勝負しなさい」というメッセージが伝わってくる。坂出裕子歌集「桃花紅」には、他にも次のような歌が収められている。

つらつらとおもんみたるに現代の歌は農葉づけの甘藍

なんとなら剥けども剥けども実がない威張つて言葉かさなれるのみ  
きらきらと輝くことは疵のない色とりどりのピーマン短歌

ピーマンは中がからつぽ空つぽのどが悪いか軽くてかるーい  
作者は「実のない短歌」や「空虚な短歌」をそれぞれ「甘藍短歌」「ピーマン短歌」と名づけて、厳しく批判している。その気概が何とも頼もしい。忘れてならないことは、これらの歌にはユーモアのセンスが光っていることだ。ただ対象を冷然と批判したのでは、どう

しても嫌味になってしまう。そうならな  
いようにユーモアで柔らかかく包みこむの  
だ。



諷刺の精神はユーモアの衣に包まれた  
時、本領をいかに発揮する。この作  
者はきつとそのことに意識的であるのだ  
ろ。

## 愛妻家の本心

栗木京子

妻でなきをみなと腕組み街ゆけりなんとわたしとしたこ

とぞ よき

岩田正「レクエルド」

笑いとほ巧みな「間」によつてもたらされるものだと思う。何気  
ない言葉でも、発せられるときの間合いやテンポや声の高低によつ  
てさまざまな笑いを引き出す誘発剤になる。

短歌は基本的に音声ではなく文字として読まれる。しかも一人称  
の独白を前提とするから、短歌の中で緩急の間を演出するのはな  
か難しい。だが提出歌は、作者のつぶやきの中に、ひとりで恐縮  
しひとりで喜んでいる「一人称の間合い」が見事に描き出されてい  
て、読みながら思わずにんまりとってしまった。

「新宿日曜」と題された一連の歌で、作者は歩行者天国で賑わう新  
宿をたまたま女性と腕を組んで歩く幸運に恵まれた。心弾むひとと  
きである。幸福感に包まれている。しかし待てよ。作者は知らぬ人  
とてない歌壇きつての愛妻家なのである。自他共に認める愛妻家が  
妻以外の女性と腕を組んでいていいのか。そこで作者はハツと我に  
還る。罪深い自分に怖れおののく。だが次の瞬間、「でもいいんだよ  
なあ、これが」と、また満足感に引き戻されてゆくのである。

結句にある一字あけの一呼吸の間合いと、それに続く「よき」の  
文語体を生かしたキリリとした歌のおさめ方が絶妙。艶やかな笑  
いを誘う歌である。



## 茶髪と髭

斎藤すみ子

職辞めて我がこの頃思うこと髭伸ばし茶髪にしてあそびたし

浜田康敬「暗」二〇〇一・秋季六三号

誰にでも、事情が許せばやってみたいことがある。特に「辞職」という人生の節目を迎えれば、その思いが強くなるのは当然のことだろう。男でも女でもある年齢に達すると、少々自信のなくなった毛髪や顔面のことを口にするのは避けようとする。あるいは逆に面白可笑しく話題にして、みずから笑い飛ばすという方法もあるにはあるが、それとても人の目を意識しての所業だ。だが浜田康敬は、そのどちらでもなくすこぶる純粋に、この頃思っていることを短歌に定着した。

他の歌から、浜田はこれまで十指に余る職業を経て、今回最後の職を辞したことがわかるが、それはどちらかといえば苦難の道であっただろう。だから「髭を伸ばし」「茶髪」にして「あそびたし」という、遊び下手の真に迫ったもの言いがいじらしく、私はすぐにこの歌を暗記してしまった。

私が記憶している若い頃の浜田は決して優男ではなく、素朴で頑丈な体型の好漢であった。「伸ばした髭」はともかく「茶髪」は多分妻子にはみせられないだろう。怖いもの見たさで、私はそれをぜひとも見たいと切望する。染めるに足る毛量を祈念しながら。



## 鼻毛抜く父親

西王 燦

おそろしく太き鼻毛を抜きたるところあけて庭の子供らと呼ぶ

小池光「草の庭」

短歌を読みながら、思わず笑ってしまふような作品の代表としてこの作品はとても解りやすい例だと思えます。この作品については武下奈々子さんは、雑誌『短歌人』のなかで、「引き抜かれた『鼻毛』はあたかも根付きの松のごとき観がある」と評していました。

たとえば、「笑い」の代表として「漫才」を考えてみるならば、そこにはボケとツッコミという役割があつて笑いを醸し出していると思われまふ。ボケとツッコミというのは、言い換えれば、権威的なものを虚仮にして笑い飛ばすという側面があります。

短歌の「笑い」は、漫才のボケとツッコミを、同じ主人公が一人で披露するところに生じるようです。

「鼻毛を抜いた」という些事を、あたかも（武下さんが解説するよ）に「根付きの松」を抜いたかのように大仰に促え、わざわざ声を

あげて「子供ら」を呼ぶところに、権威的なものをみずから虚仮にした父親像が立ち現れて、読み手を笑わせるのです。

読み手を笑わせるためには、作者が自分自身を客観的に促えて描くことが肝要かもしれません。



## 笑いの毒

浜名理香



天国は天気がよいと呼ぶけれど地獄は仲間が多いから好き

石田比呂志「忘八」

死んだら天国へ行きたいと思うのが普通の心情だ。好んで地獄へ行きたいなどと言う者はめったにいない。なのに作者は仲間が多いから地獄が好きだと言う。小さい声でささやかれた優しい本音にほっとして笑いがこぼれる。そうね、石田さんが行くんなら、私も地獄に行こうかしら、とつい思わされて、またおかしくなる。

生きものは、光のあるあたたかい所も好きだけれど、みんなが集まっているところで一緒に群れていたという欲求も持っている。スカスカの天国より、蝟集した地獄のほうが、阿鼻叫喚の活気があるって、楽しいかもしれない。

さて、天国へ行くか地獄へ行くかは閻魔帳に従って決められる。閻魔帳には生前の行状がこと細かに書き記されていて、悪行の多い者は地獄にやられる。地獄に仲間が多いのは、人が皆、普段から地獄の鬼の腋の下を流れる酸っぱい汗を舐めるような、現世を生きているからに外ならない。人の多くは地獄へ行くしかない、心優しく、貧しい、正直さの中に生きている。

笑いには毒が多く含まれている。うっかり笑ったばかりに、毒の苦さと悲しさを口に含んでしまうことがある。

## 桜が枯れた

蒔田さくら子

なんといふ不名誉なこと枯れたるは「中地さんちのまへなるさくら」  
『妻は温泉』中地俊夫

この桜については、病みやがて枯死するまでを見守る心痛の作品も数首一緒に収められている。しかし枯れきってしまうと、作者の関心はこの事態が世間の目にどう映るかということにおもむく。自らも余り芳しい現象とは思わない。まして近隣の人はどう見、どう噂するだろうか。「中地さんち」という表現にそれがうかがわれる。別の場所で枯れてくれればいいのに、よりによってと思うとき、枯死した桜はわが家の弱みを天下に晒しているかのようで、なんという不名誉なことかと嘆かれるのである。いつしか本質を逸れて、世間の目の方を気にするのは、社会に出て揉まれ、それなりの苦汁も嘗めて来た人生を物語っている。果たして近所でそんなに話題になっているかどうか。大したことはないのに、本人は結構気に病んでいるのだ。こうしたずれは、私自身の中にもあるだろう。

中地作品の面白さは、いわゆるほやきの味わいである。深刻な愚痴のほやきは陰気で鬱陶しいが、本人が何気なくふっとほやいたことが、こちらの裡に潜在するものに触れたり、言い当てられたりして照れ笑いを誘う。或いは全くそうだと共感してひっそりと笑うのだ。作者が面白いだろうと得意な作品は笑えないものである。

